

---

# クロニクル

小雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロニクル

### 【Nコード】

N7592K

### 【作者名】

小雨

### 【あらすじ】

一年中マフラーを巻いている高校生、トキ。  
スタンダードな高校生である、トキの友達、ジン。  
彼らには不思議な能力がありました。  
愉快的仲間達と繰り広げる学園バトルものです。

## 1-1-1 平方根だか何だかが

「な、放課後ヒマ？」

授業を受けていたトキに、背後から話しかけたのはクラスメイトのジンだ。

ただでさえ昼下がりの最も睡魔に襲われやすい時間帯、教師の話に耳を傾けている者はごくわずかだった。グラウンドから聞こえてくる歓声がまるで子守唄のようである。

「別にヒマだよ」

トキは授業を真面目に受けていた数少ない生徒の一人だったので、面倒くさそうに顔を半分後ろに傾けて答えた。

ジンの顔が輝く。

「おっ、マジで？じゃあちよつとさ、服買うのついて来てくんね？」  
トキはため息をつく。

「ジン：一応授業を聞いてるんだけど」

「ははっ、お前ってほんと珍しい奴だよなあ」ジンがくつくと笑う。  
授業を受けるのは当たり前だ：とトキは高校に進学するまで思っていたいたが、もしかしたら自分の認識は間違っているのではないかと思う事が度々あった。

単に学校から近いからという理由で選んだこの学校は中の上クラスの高校だったが、授業を真面目に受けている生徒というのはほとんど見受けられない。トキが通っていた中学校ではありえない事だった。

ある者は隠れてマンガを読んでいたし、あるものは携帯端末に夢中になっていた。授業が妨害されるほどの自体は今のところ起こった事はないが、これはこれで学級崩壊というのではないかと思う。

「大体学校の勉強なんか意味ねえって絶対。平方根だかなんだかが将来俺達の何を助けてくれるっていうんだよ」ジンがしたり顔で言った。

「まあ、ねえ…」トキは言葉を濁して再び前を向いた。

トキは実は、学校の勉強は将来役に立つだろうと考えている数少ない高校生なのだった。

ジンは用件がすんだとみえ、大人しくなった。ほどなく後ろの席から寝息が聞こえてくる。

絶対ノート貸してやらないからな。

トキは固く誓う。

ジンとは高校に入ってから付き合ってたが、今や一番距離の近い仲となっていた。

それまでトキは、ジンのようなタイプの友人はいなかった。

ジンはいかにも今時の高校生といった出で立ちで、人見知りも無く積極的で明るいタイプだった。

トキはというと、中肉中背、成績も中の中、教師の手にかかるタイプではなく、いたって普通の生徒である。また、授業を真面目に受けるという稀有な存在でもある。

しかし、トキには普通の生徒とは決定的に異なる事があった。

彼は一年を通してマフラーを巻いており、首より上以外の肌を決してさらさなかった。トキ達の学校には指定の学制服というものが無く、彼は常に長袖を着用していた。

そんな異常がジンの目にとまり、ちょっかいを出されているうちにいつの間にか親しくなってしまうた。

また、二人の仲は、ある事情によってさらに深化していく事となった。

あるいはジンは、トキの普通とは言えない姿を目にしてなんとなく気付いていたのかもしれないなかった。

常時マフラーを巻いている高校生トキ。

スタンダードな高校生ジン。

二人はある異常な能力を持っていたのだった。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

## 1-2- マフラーの有効活用 -

季節は春。

暖かく気持ちのいい季節ではあるが、ある国民病のおかげでトキはすっかりこの季節が嫌いになってしまっていた。トキはマフラーをさながらマスクのごとく使用し、鼻まで覆っていた。

ところで、トキ自身はいまひとつ自覚がないようだが、一年中マフラーというのはかなり目立つ。

本人の意識とは裏腹に、彼はそれなりに有名だった。

よく彼は、友人であるジンの、ズボンを腰まで落として履く行為をかつこ悪いとか言って顔をしかめているのだが、周囲は突っ込みたくて仕方なかった。

トキ達は無事に進級し、二年生になった。

トキは特別素行に問題は無かったし、ジンも人並みにサボり人並みに出席するごくごく普通の高校生だったので、留年する心配はなかった。

自販機で買った乳酸菌飲料をマフラー越しに器用に飲み終え、未練たらしくストローをくわえながらジンを待っていると、下校していくクラスメイトの女子に話しかけられた。

「あ、と、トキくん：何してるの？今日どこか行くの？」

「ルウ：知ってて聞いてない？」鼻まで上げたマフラーでの下から、トキがぐもった声で応じた。油断すると、くしゃみが出そうである。くしゃみは誰も得をしない行為だとトキは考えており、くしゃみを大いに憎んでいた。

「そ、そんなことないよ：」ルウが俯きがちに答えた。

「ふうん：ジンと話してたの聞こえてたのかと思った。うん、今日服を買いに行くの付き合うことになってる」もう正直、外に出たくないんだけどねと、鼻水をすすりながら、トキが答える。

「あ：トキくん花粉症なんだっけ。た、大変だよね」ルウが心配そうに覗き込んできた。

「うん：マジ花粉症辛いよ。ルウもだっけ？」

トキは尋ねたが、申し訳なさそうに首を振った。

「よかったね。本当によかったね。花粉症なんて、百害あって一利なし。本当に本当によかったね：」

トキが恨めしそうにルウを見つめる。

ルウの席は、トキの隣だった。クラスメイトの間ではルウがトキに抱いている感情はバレバレなのだが、自らのマフラーが孕む異常性にすら鈍感なトキである。ルウの視線に込められた感情について、全く気付いていなかった。

トキから非感染者に対する羨望のオーラが発せられ始めたのを感じたのか、ルウが気まずそうに話題を変える。

「服かあ：あ、あのさ、私もいっしょに：」

「トキっ！」ジンの声が二階の教室の窓からかぶさるように降ってきた。

「日誌書き終わったからもうすぐ行けるぞー。ちょい待っとき！」トキが身振りで了解した旨の合図を返しルウの方を見ると、ルウはいなくなっていた。

「あれ、ルウ：？」トキはあたりを見渡したが、ルウの姿はどこにも見当たらなかった。

油断したのだろうか、トキは一つ、大きなくしゃみをした。

# 1-3 一日一万歩計画

トキ達が通う高校は、制服のない学校である。

入学当初は私服で学生生活を送る事に対してモチベーションは大いにあったのだが、さすがに一年以上が経過するとあまり気も使わなくなる。

とはいえ、服が多い方が助かる事は確かだ。トキ一人では買い物などあまり出かけないため、たまにジンが誘ってくれる事に、密かに感謝していた。

街は、放課後を謳歌する多くの学生達で賑わっていた。

ジンに連れられるまま、トキは早速服屋に入った。

春先とはいえ、まだ寒い日もごくたまにあるので、トキのマフラーについてはあまり周囲の視線を集めない。しかし、これが夏ともなるとそうは行かない。好奇の視線が集まってしまふ。最も半そでを買いことがないトキは、夏に服を購入するという事はほぼ無いといっても過言ではないのだが。

「ふう…」行きつけの喫茶店に入ると、ジンはため息をついた。

「歩くのって結構疲れるよな」

ジンが情けないセリフを吐く。

「何言ってるの…」トキがあきれた様子で返答した。

「実際疲れるぜ。軟弱な昨今の高校生にとっては歩く事さえ重労働だ」

「何言ってるの…」トキがあきれた様子で返答した。

「そういえば一日一万歩歩こうみたいなのってあるじゃん。俺一度やろうとしたんだよ。でも無理だった。初日ですら無理だった。お前やった事ある？」

「いや、ないけどさ…一万歩なんてすぐじゃないの？さっき服買う時だって結構歩いたでしょ」トキがあまり興味なさそうに言う。



「いやいや、それが大した距離なんだよ一万歩って。普通に生活してるだけじゃ絶対達成できない。トキも今度試しにやってみ。やってみ。」

「お前ら…なんて貧弱な会話してるんだよ」マスターがあきれた声をだした。

「その様子じゃ部活なんかもやってないんだろ？どンドン貧弱になつてくぞ。貧弱貧弱」マスターはなぜかそこでクツクと笑った。

「ところでお前らの学校って、確かA高校だったよな」マスターが話をふってきた。

「そうだけど…なんだい今更」ジンが不思議そうに答える。

「最近噂になってるんだけどな…お前らの学校の生徒を狙って暴行事件が起きてるらしいんだよ」

二人はふと思い返してみた。そういえばクラスで話題になっていた気がする。根も葉もない噂だと思っていたが、そうでもなさそうだった。

他のクラスで何人か、被害にあった生徒がいたようだ。

「犯人像は大柄だったり小柄だったり、あんまり一貫性がないみたいなんだがな。結構酷くやられてるらしくて、重症のやつもいるらしいぞ。それにこういう武器を使ったのかわからんが、犯行現場までそうとう酷く破壊されてるらしんだ」

マスターはどこから仕入れてくるのか、静かに、しかし得意げに話してくれた。

「だからお前らも一万歩歩く歩かないとか言っていないで、もっと体鍛えとけよ。いつ狙われても撃退できるようにさ」

「襲われるの前提かよ」

「わかりましたよ…しかしいきなり鍛えるっていつてもなあ…」トキがボソツとつぶやくと、ジンは嬉しそうに言った。

「トキ、いい諺を教えてやる。【千里の道も一歩から】。ようするに」

ジンの言葉を遮る。

「わかったよ。まずは一万歩歩く事から始めてみる」

## 1-4 — The number of steps —

2 2 3 ∴ 2 2 5 ∴ 2 2 7 ∴

2 5 3 ∴ 2 5 7 ∴ 2 5 9 ∴

ジンと別れてから、トキは早速一万歩を実行にうつした。

まず自らが一日に何歩歩いているかの把握から始めないといけない  
と思い、自宅までの歩数を数えようとひとまず歩き出した。

歩き出して程なくわかったのだが、一万歩というのは中々大変である。  
通学で十分対応しきれぬ距離だとさえ思っていたのだが、考えてみれば電車に乗っている間は歩数なんて増えないし、実際に歩く範囲というのは学校から駅、最寄り駅から自宅といった程度のも  
だ。

3 1 5 ∴ 3 1 9 ∴ 3 2 1 ∴

しばらく歩行を続けているが、この調子では一万歩どころか1000  
0歩にすら到達しないかもしれない。

ジンの言う事を軽く見ていたが、どうやらこれは中々大変だ。体力  
も必要だが、根気と時間も必要な気がする。

辺りはもう暗くなっていた。まもなく自宅に到着することを考えると、  
どうやら本当に一日一万歩の歩行を行なうというのは大変なようだ。  
そういえば、結局ジンは何歩歩いていたんだろう∴そんな事を  
思いながら人気の無い公園を横切ろうとしたその時、すさまじい  
炸裂音が聞こえた。

!?

歩数を数える事に夢中になっていたトキは、驚いて足を止めた。少しの間身構えていたが炸裂音は一回きりで、誰もいない公園には再び静寂が戻る。

「なんだ今の…」

公園は東西に伸びており、森の中に作られていた。正式名称はあまり知られていないが、周辺住民は森林公園と呼んでおり、そちらの呼称の方が定着していた。街灯が点々と存在しているだけで、周囲には闇が迫っている。

今までにトキが耳にした事のあるような音ではなかった。何かが爆発するような、あるいは何かに硬い物をすごい力で叩きつけたような。

炸裂音は公園の隅から聞こえてきたようだ。何か異様な雰囲気を感じながらも、トキは恐る恐る歩き出した。心臓の鼓動が早まるのを感じる。

今のところ、特に異常は見受けられない。しかし、肌に感じる周囲の雰囲気は確実に異常だった。

あれだけ大きな音がしたのに、誰も集まってこないのが不思議なくらいである。

公園の西側は一通り見て回ったが、目に見える異常は見当たらない。後は東側の一番端にある小さなアスレチックの反対側のみである。警戒して近付き、回り込んだトキは目を細めた。

そこには石で作られた象の滑り台があるはずだった。しかし、かつて象であったそれは、もはや原型を留めていなかった。

象があったと思われる場所には、瓦礫が山となって積み重なっているだけだったのである。

トキはしばらく嘔然としていたが、やがて我に返りその場を離れた。炸裂音がしたのはつい先刻の事である。この場にいる事が危険を招くかもしれない。

周囲に気を配りながら公園を後にしたが、トキは再び我に返った。

炸裂音を耳にしてから今までというもの、歩数をカウントして  
いなかったのである。

「そりゃ間違いねえな。そんな事普通できねえもん」  
と、さも当然だろうといった口調で返されるトキがいた。

昨日の公園での出来事。象の滑り台が瓦礫の山と化していた件である。

トキが携帯で送った写真を見たジンは、断言した。

早計だろうとも思ったがしかし、トキ自身も考えていた事だった。一回の炸裂音で滑り台を粉々にし、且つ後には何の証拠も残っていない。粉々に粉碎するために使用した道具も、人物も。

何より、現場で体感した空気。あれは間違いなく異常だった。

「…どうしようか」トキは独り言のように呟く。

「どうするもこうするもないだろ。犯人探すんだよ」

「…だよな。危険だし、それに…」

トキが言葉を切る。

「それに、何だよ？」

「いや、なんでもないよ。しかし犯人探すったって、どうする？」

「実は俺、ちょっと心当たりある」

ジンが言った。

「え、マジで？」トキが意外そうな目でジンを見る。

「いや、具体的に特定できてるって訳じゃなくて、ある程度絞り込めるかなって程度なんだけどさ」

前置きをして、ジンは話し出した。

「昨日のマスターの話覚えてるか？」

「ええと…体鍛えろって話？」トキは記憶をよみがえらせる。

「いや、まあそれもあったがよ…そうだ、お前昨日一万歩歩けたの？」

「冗談だよ。暴行事件の話だろ？」一万歩についてはめんどくさかったのか悔しかったのか、スルーしたようだ。

「そそ。単刀直入に言うと、あの事件の犯人と同一犯だと思うんだよ。昨日の公園の奴は」

「どういう根拠？」

「まあ聞け。昨日マスターの話を聞いてておかしいと思ったんだよ。俺らの学校って制服ないじゃん。なのに、どうして犯人はウチの学校の生徒ばかりを狙う事ができるんだ？あの時は、どうせマスターが俺らをビビらせようとしてるんじゃないかって思ったんだけど、もし本当だとしたならちよっとおかしいだろ。私服のティーンを見て学校を特定できる奴なんているわけない。それこそ異常な能力者だぜ。俺、休み時間に別のクラスの奴から話聞いたんだけどさ、どうやら本当にやられた奴がいるらしいんだ」

それも三人。ジンは指を三本立ててみせる。

「適当にターゲット狙ってウチの学校のやつが偶然三回やられたってのは、無くはないかもしれないが確率的には低いと思うんだよ。昨日お前から写真添付されてきただろ。俺さっき、他の奴らが襲われた犯行現場の写真も見せてもらったんだよ。昨日の象さんほどじゃなかったけど、かなり激しく破壊されていた。損傷が昨日の象さんほど酷くなかった理由としては、人間を狙ったその余波であるからなのか、あるいは人を傷付けるという行為に単に躊躇したか。後者だったら嬉しいね。まあつまり、犯人はウチの学校のやつ。顔見知りの犯行ってやつだ。そして、被害者に対してなんらかの恨みがある可能性がある」

「依存性…」トキが呟く。

「そう、依存性だ。犯人はおそらく最近能力に目覚めた可能性が高い。不思議と能力者はみな、何かに依存する傾向にある。そしてそれは、突然能力に目覚めてしまった奴ほど強く強く依存心に支配される傾向にある」

それについてはトキも心当たりがあった。

「こいつの場合、破壊衝動に依存してるとかかな…わからんけど。確かに最近能力が目覚めたとしたら危険だよな。その被害者三人っ

てもう学校来てるの？」

「一人はもう来てるみたいだ。比較的軽症だったみたいで」

それでも腕の骨へし折られたらしいけどな、とジンは肩をすくめた。

「じゃあとりあえずそいつのトコ行ってみようか。もう昼休み終わるから、放課後にでも」

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。



「なにお前ら」

放課後、ホームルームが終わり次第かけつけた二人の訪問者を、タカはいぶかしげな顔で見つめた。

訪問者のうちの片方は、気温が20度近い中、何故かマフラーを巻いている。

以前一年中マフラーをつけてる奴がいると噂で聞いたことあったがこいつがそうかと、トキをしげしげと眺めた。マフラーは、基本防寒具なのである。

「いや、ケガ大丈夫かなうと思ってさ」ジンがフランクに話しかける。タカはまだ左腕を吊っていた。

「…心配してくれるのは嬉しいけど、俺お前らと話したことないよな。なんだよ急に」

タカは警戒度を高めたようだ。

「寂しいこと言うなって。人類皆兄弟っていうじゃん？もう種族規模で兄弟なんだから、同じ学校なんていったらもう相当な仲でしょタカちゃん」ジンが適当な事を言った。

「変なあだ名で呼ぶなよ…てか他人じゃねえか。どうせ面白半分で見に來ただけだろ。お前らと話すことなんかねえよ。この腕じゃ部活もできないし、俺もう帰るから。お前らも狙われないようにせいぜい気をつけろよ」

「僕らは大丈夫じゃないかなあ。サッカー部じゃないし」

「…どういう意味だそれ？まるでサッカー部が狙われてるみたいな言い方じゃねえかよ」

トキのセリフに、タカが反応した。

「いや、深い意味はないよ。ただ狙われた三人が偶然サッカー部だったってだけのこと」

トキが明らかに含みを持たせて続ける。

「ところでミヤ君って最近部活出てる？」

ミヤという名を聞いた瞬間、タカが無傷な右手で胸ぐらを掴みこんでできた。

息がかかるほど顔が近くなる。

「お前何が言いてえんだ！回りくどい言い方しやがって！はつきり言えよ、なあ！」

「わりいわりい、こいつただ心配してるだけなんだよ。ホントわりい。もう消えるから。じゃ、お大事に」

ジンが中に入って、無理やり二人を引き離し、トキのマフラーを引っ張って慌ただしく走り去った。

タカは階段に消える二人を、荒い息をつきながら見送った。

「もろだな」

「うん：もろだ。ところでジン、なんかめっちゃ嫌な役やらされた気がするんだけど：タカ君超キレてたし」

教室に戻った二人。ジンが教卓の上に座る。

「だって俺嫌な奴だと思われたくないもん。それにお前一年中マフラー着けててちょっと変な奴だと思われてるから、今更だべ。しかしあんなに取り乱すとはなあ：まあ確信は持てないけど、ミヤつてやつが怪しいな」トキがため息をついて続ける。

「学校休んでるみたいだしね。ミヤ君の家、行ってみようか：って、ちよっと待って。え、そんな変な奴だと思われてるのか！？」

「知ってるか？マフラーってのは基本防寒具なんだぜ。まあその話はいいだろとりあえず。まあ何となく動機もわかったよな。シンの言ってたことも本当みたいだし」

トキはサッカー部の生徒に対して、あまりいい印象を持っていなかった。

染髪している生徒が多く、真面目に取り組んでいるというよりは（あくまでトキのイメージであるが）ファッションでサッカーをやっている者が多いような気がしたからだ。

そんなサッカー部の中で、ミヤは少し違ったらしい。クラスメイトでサッカー部のシンから聞いたのだが、引っ込み思案で大人しい性格のようだ。

そんな性格が災いしてか、タカを始め数人の遊び道具にされていたらしく、よくからかわれていたようだった。ポジションも無理やりキーパーをさせられている。

「あいつら発言力あるからなー。特にタカは実力も伴ってたから、みんな何も言えないんだよ」シンは言っていた。

「そう、やられた奴らってみんなミヤをからかった奴らなんだよ。お前らミヤの事疑ってんの？俺ももしかしたらって思ったんだけど：ミヤにそんな事できるわけないしなあ：」

確かに話を聞く限り、ミヤという人物に暴行沙汰など起こせそうにない気がした。

しかしそれは、あくまで通常であればの話である。突如能力に目覚め、力を得たとすれば、あるいは。

「ミヤを張るぞ」

ジンが言った。

トキも同意した。彼がもし覚醒したばかりの能力者であるというのなら、ミヤを救わなければならない。

「トキ、あんぱん」

「ん」

アンパンをジンに手渡す。

中々出てこねえなあ：などとぶつくさ言いつつ、ジンはあんぱんを頬張った。

二人はタカを尾行していた。ミヤをからかっていた者達が全員襲われた今、比較的軽症なのはタカだけである。無差別に襲っているわけではないとすれば、タカが再び襲われる可能性は高かった。

「ていうかあんぱんとかさ：」トキが呆れた様子で言った。

「思うんだけど、張り込みしてる刑事って実際あんぱん食べてないと思うんだ。なんでこういうイメージが定着したんだろうなあ：惣菜パンとかの方が絶対おいしいのに」

「何言ってるんだよ、食べてるに決まってるだろ。ってかあんぱん普通においしいし。あんぱんは日本が世界に誇れる食品の一つだ。それにあんぱんには香りがいいからな。惣菜パンだかを食べてて、万が一ターゲットに匂いが届いたらばれちまうかもしれないだろ？」

「ああ：そうだね。そうかもね」

自分から話を振っておいてめんどくさくなったトキは、適当に同意して視線をタカに移した。

ジンは「そういえばあんぱんって世界的にどの程度認知されてる食品なのかな：」などと独り言のように言っていたが、無視した。

取り巻きが入院してしまっているため、一人で下校しているようだ。どこことなくソワソワして見えるような気がした。

「来るかな：」

「どうだろなー。一応タカには復讐完了してるって見ることも出来るけど：ミヤが例えば復讐心に依存していると考えれば、もう一度襲われる可能性は低いと思う。それに、先日の公園での破壊を考えると、まだ制御できてないって考えた方がいいだろうな」

二人は尾行を続けたが、ミヤは現れなかった。

もしかしたら、ジンの推理自体が見当違いだったのかもしれない。

タカの家が近付くにつれ、ジンはそう思っていた。

「もうすぐあいつの家だよなあ……今日はこないか？」 ジンが呟いた。トキもそう思い始めていた。ふと視線を上げると、タカの背後にいつの間にか人影が現れていた。わき道から突如現れたようだ。帽子を被っているので顔は判別できないが、突然背後から名前を呼ばれて振り向いたタカの顔は引きつっていた。

「ジン！」

「ああ！」

二人は視線で会話すると、走り出した。

「ミヤ！」

ジンが叫んだ。

人影は驚いたように振り向く。帽子を深く被っているが、どうやらミヤ本人で間違いないようだった。

しかしミヤは二人を一瞥すると、再びタカに向かい合った。

と、ミヤの右腕が、見る見るうちに膨張していく。

ミヤは明らかに攻撃態勢に入っていた。サッカー部の連中を破壊し、滑り台を破壊した能力の正体は、あの右腕。瓦礫の山と化した滑り台を思い出す限り、攻撃力が窺い知れる。直撃したら命は無いだろう。

二人との間には少し距離があり、間に合わないかもしれない。タカはミヤの異常を目の当たりにし、動けないようだった。

「まずいぞトキ！間に合わねえかもっ！」

「わかってる！」

トキは一本のナイフを取り出した。投擲に使用するのかと思いきや、彼は自らの手のひらを十字に裂いた。

「っ！」

血が噴出すが、血液は見る見るうちに形を変え、ミヤに向かってものすごいスピードで伸びていく。ムチのようなしなやかさだった。

完全に背を向ける形になっているミヤはそれに気付かない。血液はミヤの足に巻きつき、払った。

バランスを崩したミヤは転倒し、右手の膨張が小さくなっていく。

「ナイスだトキ！」

二人はミヤの前に立った。

「…だよ」

ミヤが何か言葉を発した。

「あん？」 ジンが返す。

「：な、なんだよ君ら。関係ないじゃないか。これは僕のふ、復讐なんだから！」

ミヤが激昂して言葉を並べる。

「こいつなんか、こいつが！こいつが悪いんだ！僕の事を、僕の事ばかり！当然だこいつがやられるのは当然なんだから！」

帽子が落ち、顔が蹶ねになる。ミヤの瞳は紅く染まっていた。能力に目覚めたばかりで依存性が強く発現している者の身体的特徴。やはり暴走状態にあるようだった。

再びミヤの右腕が膨張を始めた。

目撃証言が大柄だったり小柄だったりというのはこのせいだったのだろうか。

マスターの情報網も意外と大したものなのかもしれないなあなどと、トキはのんきな事を思った。

しかしそんな事を考えている場合ではない。ミヤは再び膨張した右腕を、今にも振り下ろさんとしている。しかし、今度はジンがそれをさせなかった。

「悪いな！」ジンがミヤとの距離を詰めると、鳩尾付近をめがけ、拳を突いた。

「うぐっ…」ミヤがうめいてうずくまる。

しばらくのたうち回っていたミヤだが、次第に落ち着いたようだった。起き上がったときは、瞳の紅は消えていた。

「な、何を…」

「大丈夫か？まあ腹も痛いだろうけど、ちょっと我慢しろよな」ジンはミヤの前にしゃがみこむ。ミヤは何が起こったか良くわからずに、目を丸くしていた。

「今お前の復讐心を攻撃したんだ。ちょっとは落ち着いただろ…あ、タカの奴にもちよつと細工しないと」言うが早いか、ジンがタカに近付いていく。

腰を抜かしていたタカだったが、ジンの接近に気が付くと我に返ったようだった。

「な、なんだよお前ら。さっきのなんだよ…」タカが後ずさる。

「なんだよ…く、来んな！お前ら、ばけも」

「おーっと、それ以上言うなよタカちん。俺達繊細だから傷ついちゃうじゃねえか」

ジンの拳が有無を言わずタカを貫く。タカは気絶したようだった。

「な…なにをした…の？」

ミヤが恐る恐る。

「色々つまずいところ見られちゃったからなあ。ちょっとアイツの記憶を攻撃したのさ。ここ数時間の記憶は飛ぶぐらいの威力で。さ、そのこの公園のベンチにでも寝かしといてやろうぜ」

ジンが加害者であり被害者であるタカを抱えて、ベンチに乱暴に寝かせた。

「あの…もしかして君らもその…僕みたいな…こういうのが？」

「おお」

「うん」

二人が声を揃えて言った。



「さっきも言ったけどな、さっきのはお前の復讐心を攻撃したんだよ。多少心が落ち着いて、瞳の色も元にもどったろ？」

ジンに差し出された鏡を見て、ミヤはうなずいた。

「ようするに俺は、なんていうか：眼に見えないものを攻撃する事ができるんだよ。さっきの場合は復讐心。タカにやったのは記憶。他にも色んなものの攻撃できるみたいだけど、あんまり試した事ないからなあ：試してみたいけど、トッキーがやらせてくれないんだわな」ジンが残念そうに言う。

「当たり前だよ：」トキが反論する。

「で、こいつは：」

「まあ見たまんまなんだけど、血液を操るんだ」

トキは手のひらの傷口を見せ、少し流れている血を色々なものに変えて見せた。

「燃費悪いし、普通に痛いから、あんまり使いたくないんだけど」トキは肩をすくめる。と、傷口の血液が固まり、流血が止まった。

「俺らはこんなところ。：もう立てる？じゃ、行くか」

ジンは座り込んでいるミヤに手を差し伸べた。

「え：行くって：どこへ？まさか警察：」ミヤが不安そうな声を上げる。

「ばか、そんなところ行かねえよ。俺らみたいな規格外をどうやって裁くんだよ。あいつらはお前苛めてた罰があたった、それぐらいに考えとけばいいんだ。そうじゃなくて、お前今でこそ落ち着いてるけどまた暴走しかねないからな。そうならないようにするんだ」

ミヤは不安そうにしていたが、トキに促されて立ち上がった。

数時間後、三人は何もない空き地に立っていた。以前大型マンション群が建つ予定だったようだが、どういうわけかここ数年間放置さ

れていて、今は完全に荒れ果てていた。

「ここなら思い切りやっても大丈夫だからな」ジンが言う。

「え…」

「ミヤの能力。まだ思いっきり開放してないんだろ？」何が何だかわからないといったミヤに、トキが説明する。

「一度思いっきり力を解放しておけば、強力な依存性にさいなまれる事はほとんどなくなるんだよ」

ミヤは自分の右手を見つめていたが、やがて納得したように腕に力を込め始めた。

右腕が膨張を始める。先刻とは比べ物にならないほどだ。

「おい、トキ…」

「うん、やばいね…」

二人は危険を察知したのか、背中を向けて一目散に走り始めた。

「ミヤ、ちょっと待て！俺らがもうちょい離れるまで…」ジンがあげた悲鳴に近い声は、ミヤには届かなかったようだ。

「だあっ！」

気合と共に地面に向けて放たれたミヤの拳は、凄まじい破壊音と共に地面をえぐり、激しい砂煙を上げた。

砂煙が収まった後、肩で息をするミヤに近付いた二人は目を見張った。

まるで爆撃でもあったかのように、地面がえぐれていたのである。

「こりゃ…」

「ずいぶん抑えてたんだな…」

二人は顔を見合わせた。

「ま、何はともあれだぜ。よかったな、ミヤ」ジンがミヤの肩を叩いた。反応が無い。

「ミヤ？」再びトキが問いかけた時、ミヤが顔をあげた。

「これ…ちよっと気持ちいいね…」

ミヤは、いい顔をしていた。

昼休みは、学生にとって貴重な時間である。

早々に食事を摂り、校庭へ遊びに行くグループ。教室内で雑談するグループ。一人本を読んでいる者。勉学に勤しむ者。

様々な昼休みの過ごし方がある。

トキとジンは、屋上で昼食を取る事が度々あった。名目的には、能力に関する会話を第三者の耳に触れるところでできないという事だったのだが、最近は二人が屋上で過ごしている事を知っている者も出てきてしまい、実際は単に開放感を味わいたいだけになっているようである。

「二人とも、普段昼休みは屋上にいるんだ」

ミヤである。先日的一件以来、ミヤもトキたちと行動を共にするようになった。

「まあなあ。でも今更だけど、屋上って勝手に出てきてもいいのかな」昼食を食べ終えたジンが、大の字になって寝転がりながら答える。

「さあ：でも鍵もかかってないし、別にいいんじゃないの」トキがどうしてもよさそうに言った。

「まあ最近俺ら意外にもたまに来てる奴いるみたいだからな：あんま油断して能力の事しゃべれないよ」といいつつ、トキはあたりを見回し、誰もいない事を確認する。

「ミヤ、あれから能力使ってみた？」

「うん：使ってみたよ。でも、公園の滑り台を破壊した時みたいな破壊力はでないみたいなんだ」

ミヤが少し首をかしげた。

「そりゃそうだ。能力が目覚めたばかりってのは、いわば暴走状態だからな。セーブがきかねえんだよ。感覚的には火事場のクソ力み

たいなもんだ。ずっと暴走状態だったらすぐにぶっ壊れちまう」

「そうなんだ：あれ以降能力発動するときも、右腕があんなに膨張しなくなってきたし、よかったよ」

「あのままだったら：膨張した右腕が破裂して：グロい事になってたかな：」トキが脅かし、三人で笑いあった。

と、階段のほうから人が上がってくる気配を感じた。三人は視線を合わせ、全然関係の無いテレビの話題などを始めた。

ガチャリ

程なくしてドアが開き、女の子が二人入って来た。

「おー、また屋上かアンタら！」

元気な声がした。メグである。

「こ、こんにちわ」後ろからルウの付いてきたようだ。

二人は自然と輪の中に入ってきた。

「あああ、いい天気だねえ。あれ、君は？何組の人」

メグとミヤは初対面だった。

「あ、はじめまして。僕はC組のミヤといいます。向こうの校舎だからあんまり顔合わせたことないかもね：」

「よろしくね。私はこいつらと同じクラスのメグ。こっちはルウ」

「よ、よろしく」

ルウが俯いたまま挨拶する。傍目にわかるぐらい赤面しているようだ。

「こいつかなり人見知りだから勘弁してやって」

メグがガハハと笑った。ルウとは正反対の快活な女の子のようで、ルウほどではないにしろ人見知りなミヤともすぐになじんだようだった。

「あんたら三人で何話してたの？」

「テレビだよテレビ。どうせ俺らの楽しみなんて、テレビとゲームとエロい事しかないんだから。なートツキー」

「え、えつちなことって…」ルウの頭から煙が見えるようである。  
「ちょ、一緒にするなって…それにテレビなんて、最近つまんなくない?」

「あー、わかる。同じような番組の繰り返しっていうかなー。昔はもつと腹かかえて笑うような面白い番組たくさんやってた気がすんだけどなあ」

「で、でも楽しい番組もあるよ」

「ほう、例えばなんだねルウさん?」

みんなの視線がルウに集まると、ルウは赤面して俯いてしまった。俯くことが多い少女である。

どうやら反射的に、避難轟々な目にあっているテレビ番組を庇ってしまっただけのようだった。

予鈴が鳴り響く。昼休みはあつという間である。

生徒達は各自教室に戻り始めた。

「んじゃま、行きますかね…」

ジンが気だるそうに立ち上がり、一同は校舎に戻っていった。

「……………能力?」

誰もいなくなったはずの屋上で呟くような声がしたのを、聞いたものはいなかった。

埃というものは、知らず知らずに堆積していくものである。

そしてそれは、公的な場であるほど放置しておくわけにはいかない。埃を好む者は、そう多くないからだ。

トキのクラスでは、当番制で埃を除去する役割が割り当てられる。俗に言う、掃除当番である。

放課後残って、教室を隅々まで綺麗にするのが与えられたミッションだ。

今日はトキの番だった。

トキは掃除が嫌いだった。マフラーが埃っぽくなってしまふのだ。最も自宅ならまだしも、教室の掃除が好きな者というのはあまりいないかもしれない。

しかし、一クラス40人近い規模の教室を一人で掃除するというのは中々骨が折れる。

サボっている生徒もいるようだが、トキは基本的には真面目な性格であるため、良心が咎めサボる事ができなかった。

しかし、放課後の教室という空間が、トキは嫌いではなかった。

普段クラスメイトと授業を受けたり弁当を食べたり雑談をしている教室に誰もいなくなるというのは、長期休暇を除けばこの放課後ぐらいなものだろう。静けさと不思議な緊張感が伴い、何だか胃がキリキリすることさえある。

帰宅部であるトキは、放課後別段やるべきこともない。一通り掃除を終え、しばらく自席でボーっとしていた。

「あ、と、トキくん」

ふいに教室の前のドアが開き、ルウが入ってきた。

「き、今日掃除当番だったんだ」

何だかドアが開く前から「あ、と、トキ」ぐらいまで聞こえた気がしたのだが、気のせいに違いない。ドアも開けずにクラスメイトが

中にいるなんて、初めから知ってでもいなければ分からないだろうし。

「ルウ。まだ残ってたんだ？」

「うん、先生にこれ張っとけて言われて」

ルウは大きめの模造紙を持っていた。どうやら先日決めた、クラス目標のようだ。

高校生にもなつてとみんな文句を言っていたが、担任がどうしても譲らなかったのだ。

ルウは別に何かの係りというわけではないのだが、担任に用事を言いつけられることが多かった。

早速作業に入ったルウだったが。作業といっても所定の位置に画鋲で刺すだけの簡単なもののなのだが：

「：ルウ、椅子使えば？」

小柄なルウは、画鋲をさすのにえらく手間取っているようだ。

「だ、大丈夫これくら：いっ」

確かにそれほど高い位置に張るわけではないのだが、ずいぶんと手こずっている。意地になっているのか台を使う事を拒んだ。

「：張るの手伝うよ」

見かねたトキが動いた。

画鋲は簡単に刺さり、かくしてクラス目標はあっけなく黒板の脇に掲示される事となった。

「あ、ありがとう：」

恥ずかしがっているのか申し訳なく思っているのか、ルウは何だか照れたように俯いた。

「や、いいって。じゃあゴミ捨ててくるから」

「あ、わ、私もいこつ：かな：」

「？一人でも大丈夫だよ。今日ゴミ箱一つだけだし。そいじゃな」  
「えっ：でも：でも：」

なんだか歯切れが悪いルウを不思議なものを見る目でみつっ、トキ

は教室を出た。

放課後の校舎はガランとしていて、まるで校内に誰もいないようだった。皆、部活に出るなり帰宅するなりしてしまったのだろう。窓からは西日が差し込んでいた。

生徒の姿が見えないせいか、何だか廊下が長く感じる。

各学級の壁には、様々な物が掲示されている。

トキは見るともなしに眺めつつ歩いた。

月刊の行事予定。クラスの目標。

はらり

球技祭実行委員の募集。

廊下を走ってはいけない旨のポスター。

はらり

受験生の心構え。

水を流しっぱなしにしないこと。

はらり

廊下がちょうど右に折れ、渡り廊下に差しかかるかというところで、トキは物音に気が付き後ろを振り返った。

普段より長く見える廊下は、妙に散らかっていた。

一瞬ゴミを落としたが歩いてきてしまったのだと思ったが、そんなわけはあるまい。ゴミ箱は抱えて運んでいたのだ。いくらなんでもこれほどの量を落としていたら気が付くだろう。

トキはふと渡り廊下を見て、歩みを止めた。



渡り廊下の両壁に貼られているポスターやプリント類。

それがトキの目の前で、それらがさながらウェーブのように一枚一枚はがれて床に落ちていった。

はらり はらり

間違いない。攻撃されている。

はらりと床に落ちた紙はしかし、重力の法則を無視してふわりと浮き上がった。トキは思わず後ずさる。

ふわりふわりふわふわ

物体浮遊。

そんな言葉が脳裏をかすめた。

すぐに周囲を見回すが、相手の姿は見えない。

当たり前である。校舎内には誰もいないと思っていたぐらいなのだ。このままここに留まるのは分が悪いと感じたトキは廊下を戻ろうとしたが、すぐに立ち止まった。

今しがた彼が歩いてきた廊下も、すでに紙が浮遊していた。それ自体はただの紙かもしれないが、なんらかの能力が付加されている可能性もあり迂闊に触れるわけにはいかない。

紙は徐々に接近してきて、トキはしだいに廊下の隅に追い込まれてしまった。紙がトキにまとわりつき、ゆっくりと覆い始める。

必死にもがくものの紙ははがれず、トキゆっくりと、しかし確実に隠していく。

トキの首までを覆いつくしたところで侵食は止まったようだ。

ふと何かが西日に反射して光るのを目の端で捉え、視線を渡り廊下へ向けたトキの心臓は跳ね上がった。

刃物。

家庭科で使用する包丁だろうか。

それが数本宙を漂っている。

何が起るかは明白だった。

自分のナイフは教室のカバンの中だ。

持ち歩くべきだった：と、自らの迂闊さを呪ったが、そんな余裕はなさそうである。

トキの能力は、自らを傷付けるか傷付けられない限り使用できない。人体にはいくつか切り傷を作れる箇所があるが、自らの肉体で直接自らを傷付けるという行為は、躊躇われるものだった。

そんなことを考えている間に、突然体にまとわり付いているだけだった紙に強い力が加わりトキは壁に押し付けられた。

「う…っ」

まるで的である。

完全に身動きがとれなくなったトキに向かって、一本の包丁が飛んできた。

「…！」

ふわりふわり

などといった擬音には到底あてはまらないほどのスピードだった。

ガッ！

冷たい汗が流れる。

トキの顔に、はらはらと壁が削れて落ちてきた。

というやら頭上に外れたようだ。否、外れたのではなく外したといったところだろうか。

しかし安心することなど出来ない。トキは動く事はできず、包丁はまだ何本も宙を漂っている。

状況は何一つ好転していないのだった。

「君、何で能力を使わないんだ」

ふいにガラガラとドアが開く音がして、声が聞こえた。

トキは驚いて声がした方に目を向ける。

旧校舎二階の一番端の教室は、確か…生徒会室。

「君の正義はなんだ？」

唐突に現れた生徒会長は、唐突に問いを出した。

唐突に問いかけられ、トキは理解するのに時間がかかった。

「ああ、答えなくていい」

再び刃が飛んできて、ワンテンポ遅れて反応しかけたトキを制した。  
トキの右頬に鋭い痛みが走る。どうやら頬が裂かれたようだ。

「ある国の話だ」

会長は淡々と続ける。

「ある女が露店から林檎を盗んだ。彼女は正義か悪か」

「ある女が露店から林檎を盗んだ。彼女は金に困っており、その日の糧を得るにも困っていた。彼女は正義か悪か」

トキは少し考え、頭の中で答えを出す。

「ある女が露店から林檎を盗んだ。彼女は金に困っており、病気の娘がいた。難病に冒され苦しむ娘に何かしてやりたいと、娘の好物の林檎を盗んだ。彼女は正義か悪か」

「ある女が露店から林檎を盗んだ。彼女は金に困っており、病気の娘がいた。難病に冒され苦しむ娘に何かしてやりたいと、娘の好物の林檎を盗んだが隣人によって目撃されていた。隣人は美しい彼女の事が前々から気に食わないと思っており、いわゆる警察組織に通報し、報奨金を得た。盗みは重罪である事を隣人は知っており、女が拘留されてしまえば病気の娘には頼るものがいなくなってしまう事もまた隣人は知っていた。彼女は、そして隣人は正義か悪か」

「ある女が」

「彼女は悪です。しかし善なる悪です」

トキが口を挟んだ。

言葉を遮られたせいか、会長の声が若干不服そうな空気を帯びる。

「ふむ。善なる悪とは妙な言葉だが、それが君の答えか。」

会長は少し考えていたが、再び口を開いた。

「ところでトキ君」

会長は再びトキに問いかける。

「君は悪か？」

「ぜ、善で」

「答えなくていい。判断するのは私だ」

トキが答えようとしたが、再びかぶせ気味に制された。

話を振られているのか単なる独り言なのか、判断が難しい人だった。と、会長の背後で漂っていた刃が再びトキの方に先端を向けた。

「もう少し君を試そう」

会長が右手を振り下ろすと、旋回していた包丁はトキめがけて飛来してきた。

いまだに紙で押さえつけられたままのトキだったが、先ほどとは少し状況が違う。

会長の放った包丁で、トキの右頬は皮膚が裂け出血していた。これならトキも力を使える。

「ふっ！」

傷口から血が一気に噴出したかと思うと一瞬にして凝固し、刃状となる。

押さえつけていた力が一瞬緩み、その隙に時は脱出する。

トキが押さえつけられていた壁に包丁が突き刺さった。

「それが君の力か。血液を操っているのか？ふむ、これでは攻撃するたび君の武器が増えてしまうな」

トキは会長に向かって走り出した。このままでは一方的に切り刻まれてしまう。距離を詰めるしかない。

なおも飛来する刃を叩き落しながら、トキは距離を詰めた。

「すでに気が付いていると思うが、私の能力は物体浮遊だ。無生物に限り、触れたものを浮遊させることができる」

会長まであと五メートルといったところだろうか。

「ところで君が回避した気になってる包丁だが：まだ力は生きているぞ」

トキはハッとし、頬の傷口から血をぬぐう。振り返りざま、ぬぐった血に力を込め、長方形の盾を作り出した。

ギーン！

間一髪、刃は盾に防がれ地面に落ちた。

そのまま盾を剣状に変化させ、振り向き様、会長に斬りつける。会長はバックステップでそれをひらりとかわすが、このまま距離をと

られるわけにはいかない。

しかし会長も考える事は同じである。右手をトキに向けると、トキの体に再び大量の紙がまわりつき、渡り廊下の反対側まで押し戻されてしまった。

「あーもう近づける気がしない……くそ、学校でここまでやるかよ……」  
再び刃が飛んできた。

トキは体にそって螺旋状に血液を回転させまわり付く紙を切り刻むと横っ飛びに転がり、そのまま来た道を駆け出した。要は、逃げ出したのだ。

「あっ……待て！」

まさか遠距離攻撃を得意とする自分から距離をとられるとは思っていなかったのだろうか。会長も走って追いかけてきた。

浮遊能力の有効範囲がどの程度かはわからないが、奇襲であればトキにも分があった。

追跡に出遅れた会長からはだいぶ距離をとれただろうか。自ら追ってくるところをみると、どうやら浮遊能力に自動追尾機能は搭載されていないようだった。

と、後ろを振り返ったトキは舌打ちした。

包丁が三本向かってきていたのだ。しかしやはり、精度は落ちるようだ。この距離なら充分かわせる……そう思った瞬間だった。

「あ、と、トキくん」

進行方向から声がし、トキは驚いて再び前を見た。ルウである。まだ下校していなかったようだ。なぜここにいるんだ。校門に向かうのであればこの通路はむしろ遠回りなはずなのに。

ルウの前で能力を使うわけにはいかない。  
しかし後方からは刃が迫ってきていた。

「……くそっ」

トキは咄嗟に、ルウを庇うように抱きしめた。

「えっ、えっ、ととと、トキくん！？……わあっ！」



ルウの悲鳴に近い声と共に二人はバランスを崩して倒れ、包丁は二人の上を通過した。

「きゃあああ！」

またもや背後から声上がる。

トキは再び驚いて振り向く。

悲鳴を上げた人物は他でもない。先ほどまで正義を語り、初対面のトキに無数の包丁を投げつけてきた人物。

本校創立以来初の女子生徒会長、スーだった。

## 2-6 — イケイケで —

「気絶してるだけっぽいんです。倒れた拍子に脳震盪でも起こしたのかな」

生徒会長はホッとした様子だった。

「よ、よ、よかった。死んじゃったかと思った…」

つい先刻まで、イケイケで包丁を飛ばしてきた生徒会長が涙目になっている姿を、トキは呆然として見つめた。

「…あっ！この！」

生徒会長が、急に身構えた。再び包丁の先端がトキに照準を合わせる。

「…あの…もう止めませんか？目的は多分果たしたんでしょう？」

「…むむ。」

少し考えていたようだったが、包丁は照準をトキから外し、彼女の頭上をふわふわと旋回し始めた。

「君はどうやら、悪ではないようだな。その女生徒をかばったのは見事だった」

「そりゃあ、庇っていなかったら先輩の包丁グサリでしたから…」

「！」

スーの顔が赤くなった。

「と、とにかく申し訳なかった。私は生徒会長として、不確定要素を取り除かねばならなかったからな。もし君が危険な能力者だったら、生徒達の安全が脅かされてしまう」

「はぁ…」

「そういえば君の友人、ジンといったか。昨日の会話の流れだと、彼も能力者なのだよな。念のため明日試してみるか…」

「！大丈夫ですよ、彼はいたって安全な男子です！」

ぶつぶつ呟き始めたスーに、トキが慌ててフォローを入れた。

「ん？そうか。まあ正しい君が言うのなら、きっと彼も正しいの

だろうな」

「先輩：今までずっとこんな事やってたんですか？」

「いや、今回が初めてだよ。能力者なんてそうざらにいるものでもないだろう？まあ能力云々に関わらず、正義を著しく逸脱していた者達にはそれとなく制裁を加えていたがな」

そうなんですかーと頷きつつ、後半に関してはスルーした。

「でも焦りましたよ。ルウが急に出てきたから、咄嗟にかわせてよかったけど…へたすりゃ突き刺さってましたよ」

「！わ、わかってるから！わかってるから！もうその事は言うなっ！」

またも焦りだしたスーを面白そうに眺めた。

「わ、笑うな！これは…依存性というやつなんだ！私は恐らく自身思考に強く依存しているようなのだ…人は多かれ少なかれそうだと思うが…自分の思考した範囲外のことが発生すると、必要以上に取り乱してしまう…」

なるほど…と、トキは思う。

「試して悪かったな。もう掃除係の職務を遂行して構わないぞ。私も下校する。もうすぐ中間試験も近いことだしな。それではな」

「あ、スー先輩」

「なんだ」

「包丁…片付けた方が…あと紙も掃除した方がいいんじゃないですか…」

「！わ、わかってる！今やろうとしたのっ！」

再び顔まで真っ赤になる。

どうやらこの先輩、一度考えから逸脱した行為が発生するとグダグダになってしまうようだ。

ほんの数分前に串刺しにされそうな目にあったにも関わらず、必死に紙片を拾い集める先輩を見て、トキは思った。  
能力使って集めればいいのに、と。

「へえ：そりゃなんというか、ご愁傷様だったな」

翌日の屋上。トキは早速昨日の出来事をジンに伝えた。

「まさかあの生徒会長が能力者だったとはなあ：全然気が付かなかったぜ。俺達みたいな一般生徒とは縁がないもんなあ：」

屋上で寝転びながら、空を見上げていた。雲がゆっくり流れていく。過ぎしやすい陽気だった。

「能力も強力だった。あれ、あの人本気でやってたら多分切り刻まれてた。退治されなくてよかったよ」

「物体浮遊か。確かにな。俺とかミヤの能力なんか、基本的には近付かないとどうしようもないから齒が立たないかもなあ：でも、ははっ、退治って大袈裟だな。妖怪でもあるまいし：俺達一応ただの高校生だぜ」

しかしトキは思う。あの生徒会長だったら、彼女の正義を著しく逸脱したものにはそれ相応の制裁を加えてしまうのではないかと。そして実際、実行していたような節があった。

「いや、それはわかんないよ。ジン、ヘタすりゃ今日はお前が試されてたんだぞ」

「ふーん。でも、あの美人生徒会長さんに試されるんだったらちょっと嬉しいかもな。でもやっぱり変わってるのかなあ：」

ジンはシシシと笑った。

容姿端麗、頭脳明晰。おそらくそれが、生徒会長スーに対する一般生徒の認識だろう。変わっているといったのは、彼女は指定の制服が無い学校において、なぜか常に制服を着用していたからだ。

トキは思う。確かにスー先輩は美人だけど、決して進んで関わりたくはないと。

「あ、そういえばスー先輩の依存性なんだけどき、ちょっと面白いんだよ。なんていうかギャップが」

「君達、少し会話が無防備すぎるな」

上から声が降ってきた。

驚いて起き上がり声の聞こえた方を見上げると、屋上にある給水施設の上にスーが仁王立ちしていた。

「わ：せ、先輩」

「あ、もしかして昨日もそこで会話聞いてたんですか」

「そうだ。君達も能力の事を他人に知られたいわけではないだろう。もう少し周囲に気を配ることだな」

最もな話である。実際昨日の会話は第三者であるスーに聞かれてしまっていたのだから。

「君がジンか。始めましてだな。トキが言うには君は安全な男だそうだな。安心したぞ。君とは個人的に今日会おうと思っていたのだが、その心配はなかったようだな」

「あー、そういえばスー先輩！昨日の質問の答えってそういえばなんなんですか？」

ニュアンスこそ違えど、安全な男呼ばわりされたジンの視線が痛くてトキは話題を無理矢理変えた。

「ん？あれはまあ君の考えを知ればと思ったただだから、別に答えという答えはないんだがな。あくまで私の見解という事で言わせてもらえば…」

会長は少し考え込んで言った。

「林檎を盗んだ女は悪だ。盗みが悪なのは知っていたわけだし、法は守るから効力が発揮されるわけだ。それに、林檎を売っていた者の境遇を全く考慮していない。あるいは林檎売りも苦しい境遇にあるかもしれない。また、隣人の女の行為が嫉妬から来ているものかとしても、悪を通報するという行為自体は悪ではない」

だが、と一呼吸おく。

「だが、素直に考えればいいと私は思う。病気の娘の事は心配だし、母が娘を思う気持ちは美しい。それに嫉妬という感情はあまり気持ちのいいものではないからな。鬼子母神的な考えを推奨するわけで

はないが、昨今の子を子とも思わないような母親にはむしろ見習って欲しいぐらいだ。まあ要するに難しい事を考えすぎず、正しいと思うことをすればいいと思うのだ。私達はまだ高校生なのだからな」トキは内心、少し驚いていた。完璧人間だとばかり思っていたスーだったが、自分に近い考え方を持っていることがわかったからだ。

「おい、何の話だよ」

ジンが耳打ちしてきたが、トキは答えなかった。昨日自分が死ぬ思いをしたことを考えると、なんとなくジンに教えるのが嫌だったのだ。

「ん、まあ会長とのヒミツってことで」

「おい、なんだよそれ。もったいぶんじゃねえよ」

その時、扉が開いてミヤが入ってきた。

「君がミヤかな？ 始めましてだな。私はスーという…」

その時突然強風が吹き、仁王立ちを決め続けていたスーのスカートを、裏生地を見せつけるがごとく激しくめくり上げた。

「……！」

「……！」

「……！」

「……！」

「……見た？」

必死に首を振る三人だったが、優しい嘘である事は明らかであった。予定外の事が起こり動揺したスーが、刃物の雨を降らせた。

ジン、わかったか？ これが会長の依存性だよ。

隣で必死に刃物をかわしているジンを見て、トキは思ったものである。

### 3-1-1 カツ揚げ

ミヤはあまり友達が多い方ではない。サッカー部を辞めてからは、部員達とは特に接点がなくなったため、それはさらに顕著になった。クラスに完全に孤立している、もしくは苛められているというわけではないのだが、かといって親友と呼べるような仲間がいないことも確かだ。ゴールデンウィークも終わり、徐々に汗ばむ陽気となってきたこの時期になると、クラス内でのグループ構成はほぼ完成されているのだった。

休み時間は、トイレに行ったり授業の準備をしてボーっとすごす。休み時間ともなればかつてはサッカー部員達にからかわれていたことすら、なんだか懐かしく思えるぐらいだ。もっともこれは今だから言えることであるのだろうか。

しかし今のミヤは、それを寂しいとは思わなくなっていた。クラスこそ違えど、異能を持つ自分の事を理解してくれる仲間ができたから。

帰宅部となったミヤは、そんな事を考えながら帰宅していた。

しかし帰宅部を名乗るからには、帰宅という行為は部活動と言えるのかもしれない。

という事は、ほぼ毎日ミヤは部活を行なっているのだ。自分はなんと活動熱心なことか。

などと何の意味も無いことを考えていると、後ろから原付バイクの音が接近してきた。

ミヤは何となく道路の端に寄ったが、バイクの音が徐々に静かになり、減速されているのがわかった。

不審に思っミヤが振り返るなり男が真後ろに立っており、ミヤを壁に押し付けるような格好になった。

「お前高校生か？突然で悪いんだけど、すみませんが少しお金貸してくれませんか？後で絶対返すから」

余りに腰の低さに、ミヤは自身がカツアゲされているという事実に気付くのに少し時間がかかった。

人通りが少ない道路であるため、人影は見当たらない。

殴り合いのケンカなどしたことがないミヤだったが、さすがに無抵抗でお金を差し出すことはためらわれた。

「い、いやです」

ようやく絞り出した否定の言葉は震えていたが、少しでも抵抗できた事で勇気が湧いてきた。

「嫌？なんでだよ、こんなに頼んでるのに…どうしてもか？」

「い、嫌なものは嫌だ」

今度は先ほどよりしつかりとした声で拒絶の意志を伝える事ができたようだ。

このお金は決して多くは無いながらも、父親が働き母親が与えてくれた、大切なお金である。赤の他人に奪われるぐらいなら、無駄遣いしたほうがまだ有意義であるとさえ思った。

「そうか…申し訳ないが、力ずくで貸してもらうぞ。絶対返すから心配するな」

ああ、もうダメか…そう思ったとき、

「ミヤー、何やってんだ？」

ききなれた声が聞こえた。

下校中のジンとトキだった。異能を持つ自分を理解してくれる、数少ない異能を持つ友人達。

「誰そいつ。友達？」

ミヤは首を振った。

「三対一か…別に構わない。お前ら、誰か俺にお金を貸してくれませんか」

ぶれる事のない、相変わらぬ腰の低さだった。



思わぬ腰の低さに三人は改めて、カツアゲ執行者の顔を見た。

「…………あれ、お前サキじゃん」

ジンが口を開いた。

「久しぶりだよなあ。中学卒業して以来だっけ？」

「いや、確か一度同窓会で会ったよ」

3人は公園のベンチに座っていた。それほど大きな公園ではないが、記念碑のようなものが建造されている。ジンだけは、野球部でもないのに素振りをするそぶりをしていた。

「ミヤ君だったか。すまなかったな。ところで誰か、お金を貸してくれないかな？絶対返すから」

相変わらず貪欲に金銭の提供を求められ、三人は顔を見合わせた。このサキという男は見た目がかなり凶悪であるため、丁寧な口調で言われたところで別の怖さがある。

「おいおい：さっきから何なんだよそれ。お前らまず自己紹介とかしたらどうなん？」

それもそうだなと、サキと呼ばれたカツアゲ執行者は話し出した。

「俺はサキ。中学時代、ジンと一緒にのクラスだったんだ。お前らの学校は私服でいいな。うちはだっさいブレザーだよ」

サキは自らの着用している制服を卑下したが、三人はそれほどださいとは思わなかった。服装の事に関して言えば、トキなどはこの季節にもかかわらずマフラーを着用している。

「ええと：トキといいます。ジンくんとは一緒にのクラスで：色々とお世話になったりお世話したりしてます部活は帰宅部」

「ミヤです。元サッカー部、現帰宅部です。：色々あって二人とは仲良くしてもらってます」

「お前ら三人とも同じ部活か。もしかして部活動の帰りだった？」  
サキがボケなのか素なのか判断しかねる発言をしたが、ジンがスルーして話し出した。

「自己紹介がヘタなやつらだな：まいっか。楽しくやろーぜー。ところでサキ、お前カツアゲとかするタイプだっけ」

「人聞きの悪い事を言わないでくれ、カツアゲなんかじゃない。さつきからちゃんとお願いしてるじゃないか。それに絶対返すし」  
危うく暴力に訴えられかけたミヤは複雑そうな顔をした。

「一般的にはそれはカツアゲじゃないかな…」トキも複雑そうな顔をした。

「どうしたんだよ。なんかあったのか？俺達に出来る事でよかったら力になるぞ」

「お金を貸してくれ」

ジンは目を細めた。

「いや、別に金なんかいくらでも貸すよ。ま、大して持ってねえけど。でも理由ぐらい話してくれたっていいだろ？中学時代つるんだ仲じゃん」

しかし…と尚もしぶるサキだったが、次第にジンに押し切られ話を始めた。

サキの進学した高校は、いわゆる不良と呼ばれる生徒が多くの割合を占める学校だった。

大柄で目つきの悪いサキは不良達に目をつけられる事も多かったがしかし、特定の不良グループに入ることではなく、どちらかというと普通の生徒達と一緒にいることが多かった。大人数でつるむ事を面倒だと思っていたし、外見の怖さから誤解を受けることは多いがサキは決して不良というわけではないのだ。

その外見の凶悪さに目をつけられ、入学式の日から絡んでくる者もいたぐらいである。

絡んでくる者達を振り払わざるを得ない事も多々あったが、正当防衛の範囲と言えるものがほとんどであった。

力ではサキをどうこうできないと判断したいくつかのグループは、今度はサキを仲間に引き入れようと口説いたが、どのような手段にも決してなびかないサキをどうこうしようという者は次第にいなくなった。

彼は彼の友人達と、慎ましい学園生活を送りたかったただけなのだ。一年が経ち学年が繰り上がる頃には、そのささやかな願いはほぼ達成されていた。

不良達は、サキに不干渉を決め込んでいた。ユウマが転校してくるまでは。

「え、そのユウマって奴にお前負けたの？」

ジンが驚きの声を上げた。

「ああ……まあな。手も足も出なかったというか、ケンカにならなかったというか……」

サキが悔しそうな顔をした。

「ジン、サキ君って強いのか？」 トキが耳打ちする。

「少なくとも、俺はサキが負けるところはあまり想像できない」

「見た目も怖いしねえ」

ヒソヒソと話す三人にサキが割り込んだ。

「呼び捨てで呼んでくれて構わないよ。俺も正直ケンカには自信があったんだ。負けたこと無かったからな。別に天狗になってたわけじゃないけど、少なくとも普通の高校生に負ける気はあまりしなかったんだ……が」 サキが言葉に詰まる。

「ユウマに歯が立たなかった。どういうわけか、俺の攻撃が全然効かないんだよ」

### 3-3-1 サティアグラハ

そいつが転校してきてから…サキは話し出した。

「そいつは見る間に不良たちを統率していったんだ。鬱陶しい不良共が大人しくなっていくのは構わなかったんだが、一通り不良グループを傘下に入れたら今度は俺達に目をつけたみたいで。俺達って言うのは、非不良のグループの事だ。俺に仲間に入れと言ってきた。俺はそういうのに関わるつもりはなかったからお互い非干渉にして欲しいと言ったんだが、受け入れてもらえなくてな。やり方が段々暴力的になってきたんだよ」

「暴力的？」

「有体に言えば、仲間に入らなかったらお前らボッコボコにしちゃうよ、みたいな事だ。そんな事言われても、俺達は敵対意識もなにもそもそも持ちっちゃいないんだけどな。何のことはない、アイツも結局暴力で不良達を支配していたんだ。俺は気が乗らなかったが、仕方が無い。いつもの調子で火の粉を振り払おうとしたんだが…」

「負けたのか」ジンが飾らずに言った。

「ああそうだ。」サキが悔しそうに言った。

「さっきも言ったが、攻撃が効かないんだ。俺は次第に消耗して、周囲のやつらにいいようにやられたよ。許してほしければ金持って来いって言われてな。そうしないと他の奴らにも同じ事するって言うんだ」

「いくら持って来いって？」

サキは金額を告げた。それは高校生が正攻法で手にするには少々無理のある額だった。

「それでカツアゲしてたってわけか…」

「カツアゲじゃない、借りるだけだ。ちゃんと返すんだから」

「ねえ、ジン君トキ君。ユウマって人もしかして…」

「うん…かもしれない」

「俺もそう思う。サキが全く歯が立たないってのがそれを証明してる気がする」

「何の話だ？とにかくそういうわけなんだ。悪いが金を貸してくれないか」

「サキ」

ジンが口を開いた。

「金は貸せない」

「そうか…」サキの声音が低くなる。

「金は貸せないけど、力なら貸せる。俺達をユウマって奴のところにあんししてくれなか？」

「ジン：いやしかし、人数の問題じゃないと思うぞ。正直言って、俺よりお前達が強いって事はないだろう」

「は、はつきり言うな…確かに単純なケンカだったらお前には勝てないだろうけどな。相手によるさ。ゲームなんかでも苦手属性なんてあったりするだろ。あんなイメージ」

サキは少し考えていたが、

「…わかった。ありがとう」

頭を下げた。

体育会系の部活動に所属する生徒であればそれなりに経験はある事かと思うが、帰宅部員が他校に入るというのは、あまり無い体験である。

帰宅部とは基本的に己との闘いであるので、他校と試合するなどといったことはもちろん無いからだ。

ミヤはつい先日までサッカー部員であったため、他校を訪問して試合をするといった経験もあるようだが、トキとジンは生粋の帰宅部員であるので、現在の状況には中々緊張していた。

学校という建築物は、校舎自体は似たような構造であるにもかかわらず、そこには在籍校には無い不思議な緊張感というか、違和感のようなものが漂っているのだ。

ましてやサキ以外の面々は制服を着ていないので、学校に残っていた生徒からの視線を大いに感じた。

「なあ、本当に大丈夫か」サキが心配そうな声を出した。

「なんだよ、お前見た目に似合わず以外と心配性だなあ」ジンが茶化すように言った。

サキが言うには、ユウマ達は体育倉庫にたむろしているらしかった。

「お前らしくもない心配なんかしてないで、まあ俺達に任せろ。その代わり、ユウマと会うのは俺達だけにして欲しいんだ。お前には他の不良達を足止めしてほしい」

「それは構わん。じゃあ少しここで待っててくれ」

言うが早いのか、サキは体育倉庫に飛び込んでいった。

数秒としない間に怒号が響く。

サキが体育倉庫から飛び出し、そのまま不良達を引きつけるようにして離れていった。

「さ、サキ君なにしたんだろう？」

遠ざかっていくサキ達を物陰から見送りながら、ミヤが不安げ言う。  
「さあなあ。二、三人ぶん殴ったんじゃないか？」

何人か鼻血を出している生徒がいたようだった。

「なんて手際：彼本当に不良じゃないの？」

「ははっ、どうだろうなー。さて、この先にいるんだったな。いき  
ますかー」

夕暮の体育倉庫は薄暗かった。三人は体育倉庫独特の空気感に包ま  
れる。

「なんだお前達？」

跳び箱の上で人影が起き上がるのが見えた。

「ええと、サキ君の友人です」

「ああアイツの。今の何だったんだ？突然暴力ふるって飛び出して  
ったぞ」

ふふふ、とジンが不適な声をあげる。

「お前がユウマだな？アンタを退治しに来たんだよ。サキの代わり  
に」

「：なんも知らないのか？お前らアイツより強いのか？てっきり代  
わりに金でも持ってきたのかと思ったんだがなあ」

ユウマは三人を前にしても余裕のある表情を崩さなかった。

「あいつよりは多分弱いけど、あんたよりは多分強いような気がす  
る」ジンが挑発的に前に出た。

「はっ」

ユウマは鼻で笑うと、跳び箱の上から飛び降りた。

「別にそりゃ構わねえ。で、なんだ、お前らが勝ったらあいつらに  
手を出すとか言う気か？」

「あーまあそれでいいや。とりあえずさっさとやろう」

ユウマが突然何かを投げつけてきた。薄暗い体育倉庫の中ではあま  
りはつきり見ることはできないが、ジンがそれを払いのける。



ユウマはすでに接近してきており、ジンの腹に蹴りを見舞う。

紙一重でそれを交わし、ジンも拳を返した。

「それなりに場慣れしてるようじゃねえか」

「お褒めに預かり光栄でございます」

「ふざけんな、おらっ」

再び蹴りかかってきたユウマの足を流しバランスを崩すと、今度はジンの拳がユウマに直撃した。

「いてえっ！」

悲鳴を上げたのはジンだった。

「あぶね：お前結構やるな。サキの知り合いつてだけはあるわ。でもアイツより強いつて事はなさそうだな」

「最初に言っただじゃん」

「まあどうでもいいや。お前の攻撃はどうせ俺には効かねえんだ」

「トキッ」

「ん」

「たぶん予想通りだ。もういいよな」

「うん」

「何言ってやがる」

「お前の事が大体わかったってことだ。攻撃が効かない？もう一度試してみたい？」

「バカが。おら、やってみろ」

ユウマが腕を拡げた。

「じゃ、遠慮なく」

ジンが余裕のユウマの腹へ右拳を叩き付けた。

「つつあああああつあああああ！」

今度は苦痛の声と共に、ユウマが膝をついた。

「お、お前何しやがった！俺に打撃がき、効くわけが…」

「さて、何でだろうなあ。殴られて痛みを感じるなんて久々な感じ？一応もう2，3発いくぜ。加減はしてやる」

再びユウマの悲鳴が上がった。ユウマはもはやうずくまってしまい、

戦闘の意志はないようだった。  
「終了」

### 3-5 ー 痛み ー

ユウマとの戦闘の後、不良達を撒いたのか始末してきたのか、サキは割とすぐに戻ってきた。

「お前ら大丈夫か！ユウマは！？」

「あいつは…死んだ」ジンが首を静かに振った。

「！？なんだと！」

「いや、冗談だよ。中で伸びてるよ。今のうちに痛めつけるなりなんなり好きにやっちまえ」ジンが耳打ちした。

「いや、そういうのはいいよ。要は俺達に手出してこなければそれでいいんだ…ちよつとどっか隠れてくれるか？」

サキはたった今駆けつけてきた道に戻っていった。

「サキくんどうしたんだろ？」

サキに言われたとおり、三人は体育倉庫の裏に隠れた。

辺りはずいぶん薄暗さを増していたので、三人が隠れている場所は表からは見つかりそうもない。

しばらく息を殺して待っていると、数人の声が近付いてきた。

サキと、サキに叩きのめされた不良達が戻ってきたのだ。

「お前ら、中入ってみろ。お前らのボスが寝てるはずだ。どういう意味かわかるよな？」

10人近くいる不良達は腫らした顔をみあわせ、恐る恐る口を開いた。

「わ、わかったよ…俺達はもうあんたに手をださねえ」

「俺に、じゃない。俺達に、だ。クラスの俺の友人達にも不可侵を約束してもらう」

「あ、ああ…あんたらには何もしない」

「よし、それでいいよ。お前らも、もしかた何かユウマに言われたら、その時は俺に言えよ」

「お前…そんなに強いのになんであんなだせえ奴らとばっかりつる

んでんだよ。俺達と一緒にこの学校しければやりたい事できるんだぜ！」

サキはしばらく黙っていた。その沈黙は不良達を威圧するのに十分な時間だった。ため息をついてサキは話し出す。

「俺はこんな外見だから誤解されやすいみたいんだけど、ケンカなんかこれっぽっちも好きじゃないんだよ。痛い思いするのも嫌だし、誰かに痛い思いさせるのも嫌なんだ」

「アイツが結局色々相手するはめになるのは、人の痛み＞自分の痛み、だからだ。中学時代からそうだった。要するに凶悪そうに見えるってすげーいい奴なんだよ」ジンが体育倉庫裏でまとめた。

翌日の昼休み。昼食を食べ終えた三人は、いつもどおり屋上で談笑していた。

「体を硬くする能力？」

「そんなところだろうな。いくらサキがケンカ強くても、さすがに能力者相手じゃ分が悪いわな」

「いや、でも思うんだけどさ。昨日ジンは一発攻撃しただけで相手の能力見破ったみたいだったけど、あれだけじゃ何の能力か断定できなくない？」

「殴って硬かったんだから決まりだろうが。サキが言ってただろ？次第に消耗して周りのやつらにやられたって。だからそれ自体は攻撃的な能力じゃないとは思ってたし。それに」

「それに？」

「俺の戦いの勘がそう言っていた」

トキはため息をついて寝転がった。空が青い。

「ジン君はどうやったの？」

「痛いって感覚に直接ダメージ与えたんだ。もちろん加減したぜ。でも、いわば守備力ゼロのところを直接ぶん殴ってるようなもんだ

から、かなり効いたんじゃないかな」

「ところでジンってさ、中学時代不良だったの？」 トキが興味深そうに言う。

「あ、僕も思った。サキ君とつるんでたんでしょ？ なんか意外とケンカも強そうだったし」

「いや…意外とおい。まあそんな事はいいいじゃないの」  
階段から話し声が聞こえてきた。

「おーっす男子諸君！ 女の子達がきてやったぞー」

快活なメグの声が聞こえ、後からいつものようにルウが顔をだした。一同は能力についての話をやめ、テストがどうの、お笑い芸人がどうのといったくだらない話に精を出すのだった。

「恐らく能力者です…俺達のような」

「そうだね。君が負けちゃうんだもんね。さすがの君も一般人には負けないだろうしね。それで、そもそもユウマ君はなんでその人達と闘うことになったのかな？」

「そ、それは…あいつら、この街を掌握するとか何とか言ってます…それで…」

「掌握…！ そりゃ本当か！」

「は、はい…」

「おい、ちょっと待ちなよ。もっとちゃんと話聴かないと…」

「そんなやつら放っておけるかよ！ 俺達がなんとかするしかないだろ！ 俺達風神雷神が！」

「自分で通り名呼ぶなよ。恥ずかしいだろ…」

「あいつら多分●●の生徒です。制服の無い学校。名前はジン、トキ、ミヤ。他の二人はわかりませんが、ジンってやつは間違いないかと…」

「俺に任せろユウマ…俺達が絶対にこの街守ってやる！」

一人はため息をつき、一人は大いに燃えたぎり、一人は内心ほくそ

笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7592k/>

---

クロニクル

2011年10月5日18時18分発行